

相談支援係
072-941-3365

ICT教育推進係
072-943-5785

研究研修・幼児教育係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから



第1回幼保こ小合同研修会

令和8年5月22日(水)午後3時～午後5時に第1回幼保こ小合同研修会を八尾市文化会館（プリズムホール）会議室1で行いました。講師は大阪総合保育大学 神長 美津子 特任教授で、研修テーマは「『幼児教育と小学校教育の円滑な接続のために』～子どもの育ちや学びをつくる～」です。

幼児教育から小学校教育に「学びをつなぐ」ためにどうするか

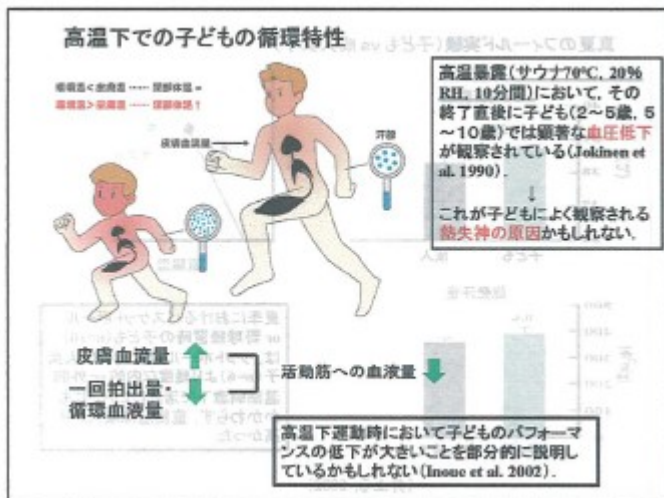
- これまでも幼児教育では、具体的な姿から幼児の内面を捉えてきた。遊びや生活する幼児の姿の記録から、どのような姿が、5領域で示された内容や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」につながるのかといった事例は蓄積されつつある。
- しかし、どのような姿が、どのような資質・能力を、どのように育てているのかといった話し合いは十分とは言い難い。5歳児の保育では、「遊びの中での学び」で起こっていること、「遊びや学びのプロセス」を捉えることが必要ではないか。そのことが、小学校1年生の授業（環境の構成や援助）を考えるヒントになる。

→ 「架け橋期の教育」の充実のためには、「遊びや学びのプロセス」の視点から、幼児教育を「見える化」していくことが必要

<受講者感想>

- 就学前の児童が体験的な学び（無自覚な学び）から、小学校の問いを自ら考える主体的な学習に繋がることを知った。活動の中で出た児童の気づきや疑問などにアンテナをはって、答えをすぐに導くのではなく、「なぜ」に付き合い、待つことの大切さを改めて感じた。
(小学校)
- 学習や遊びの中での友だちとのやりとりや個人思考が学びをつくっているの、子どもがもっと考えることのできる環境をつくるのがとても大切であると改めて思った。
(小学校)
- 夢中になって遊ぶ遊びが深い学びに繋がっているという事を学んだので、子どもの心が揺れている瞬間を見逃さず、思考を深める声掛けを考え、保育をしていきたい。
(就学前)
- 幼児教育と小学校教育のどちらかを重視すればよいというものではなく、双方がしっかり連携し、歩み寄っていくことが必要だと感じた。
(就学前)

幼児教育研修＜健康及び安全研修＞



令和8年5月29日(金)午後3時～5時に幼児教育研修＜健康及び安全研修＞を八尾市水道センター4階大会議室で行いました。講師は大阪国際大学 井上 芳光 名誉教授で、研修テーマは「子どもの体温調節特性としれに基づく熱中症予防」です。

＜受講者感想＞

・子どもは大人より「あかん／もう無理」と言うてからの予備力が少ないという事を知った。子どもは体調が悪くなるスピードも速いので、うまく伝えられない子どもの様子に気づき、早期発見、早期対応へ繋げることが大切であると感じた。

- ・今まで何となくわかったつもりでいたが、隣同士で説明してみると、説明することの難しさを感じた。そのことに関して十分理解していることが大切であると認識した。
- ・熱中症の原因や症状が細かく分類されているということは、教師として知っておかなければならないと再認識した。10月に行われる運動会に向けて、8月から体を慣らせて子どもが熱中症にならないように注意したい。

初任者研修④（授業づくり2 水泳指導研修）

↓ しびきプール



令和8年6月4日(木)午後2時～午後5時に初任者研修④（授業づくり2 水泳指導研修）を八尾市立屋内プール「しびき」で行いました。更衣の後プールサイドでしびきコーチから、陸上・水中監視方法を学んだあと、3班に分かれてクロール・平泳ぎ・水慣れの指導方法を学びました。休憩・飲水を交え、安全に配慮しながら研修を行いました。

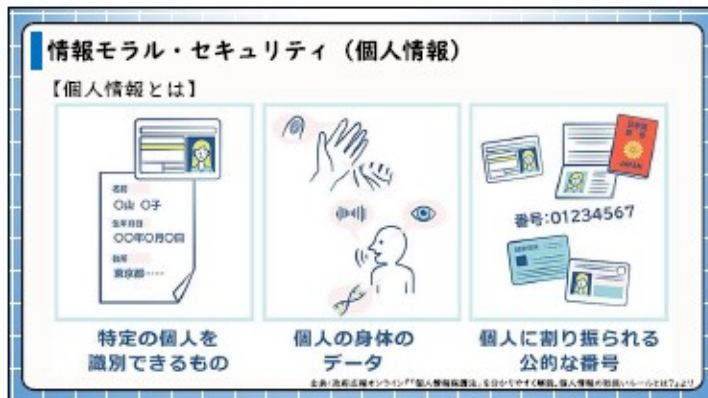
＜受講者感想＞

- ・「泳ぎの動きを細かく分けて段階的に指導することの重要性」から、実際に指導方法を体験する中で、教員が当たり前に行っていると感じている動きでも、児童にとっては、難しい場合があることを改めて実感した。私は普段の授業でも、つい「わかったかな」と全体に向けて説明して終わっていることがある。今後は、水泳指導においても、一人一人のつまずきを丁寧に見取り、どの動きで困っているのかを把握しながら、指導していきたい。
- ・水泳研修を通して、子どもたちと関わる上で大切にしたいことを改めて考えることができました。今後は、安全を第一にしながら、一人ひとりが安心して活動できるよう、丁寧に声をかけていきたいです。また、水に対して不安を感じる子には無理をさせず、小さなできたかを積み重ねられるよう支えていきたいと思います。
- ・プールが苦手な子どもたちが楽しくプールをできるのかというところ、また、一つの手や足の動きができてこそ、次の泳ぎができるというところの一つ一つをおさえるからこそ次のことができるという点は他教科や校種に関わらず通ずるところがあると思います。自分自身が今見ている中学生の子どもたちや教科の中でもまずは一つ一つをおさえて、次のことを考え

るということを意識して指導していきたいと思います。

初任者研修⑥・新規採用事務職員研修⑥

↓ 研修使用資料



令和8年6月11日(木)午後3時～5時に初任者研修⑥・新規採用事務職員研修⑥を行いました。最初に「学校ICT研修―八尾市のICT環境について―」と題して本センター 戸田 智規 指導主事（ICT 教育推進係）より講義をおこないました。次に「学びを深めるための効果的なICT活用―ロイロノート体験―」と題して業者担当者から講義がありました。最後に「学びを深めるための効果的なICT活用―e ライブラリ体験―」と題して業者担当者から講義がありました。

<受講者感想>

- ICT を導入する際には、単に技術を使うだけでなく、教育の目的や生徒のニーズに合わせて適切に選び、使いこなすことが何よりも大切だと再認識しました。技術の進歩に追いつく努力とともに、教育の本質を見失わないことが重要だと感じました。
- 今回の研修を通して、1人1台端末の活用における注意点や取扱い方法について学んだ。端末の破損原因として最も多いのが落下であるため、日頃から丁寧に扱うことや指定された場所に保管することの重要性を理解した。また、学級経営の視点からも、破損を防ぐための置き場所や使用時のルールを事前に決めておく必要があると感じた。
- ICT 教材を使うことが目的化してしまうことが最もよくないといことに改めて気づきました。”ICT を使う”ことの一番の目的は子どもたちの学習を深めるためであり、周りとの意見交換、情報共有などを行うためだと分かりました。ICT の活用に限らず、授業をつくるときにはどのようにすれば子どもたちが理解しやすいか、考えを深めることができるかを考えながら行っていきたいです。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターB棟（東側）の2階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も2週間の貸し出しを行っております。今回は6月から7月に配架した雑誌の誌名と目次の一部と書籍の内容を紹介いたします。

「こころの科学」（日本評論社）No.248 2026.7 Jul

・特別企画 バウンダリーを語ろう 支援を生きる関係性の視点

特別企画 「バウンダリーを語ろう 支援に生きる関係性の視点」の編者である明治大学子どものこころクリニック 山登 敬之（やまと ひろゆき）院長が冒頭で「何故またカタカナ語なのか、と年配者は眉をひそめるかもしれぬが、・・・」と述べておられます。私がこの雑誌を手にした時の感想そのままです。「なんだ、分かって書かれているのか」と、少し安心しました。それにしても「年配者」だけに限定されるのは言い過ぎのように感じます。山登氏はいったい何歳の方だろうと調べてみると、私とほぼ同世代です。しかも、かつて（1992年―2005年）劇団東京乾電池に所属し、創作、評論に携わられたとのこと。カタカナ語を操る難しい先生という印象が一気に変わりました。なにせ東京乾電池と言えば、柄本明氏他そうそうたる役者を輩出している劇団ですから。学術に關係する芸能人と言えば

私の中では元ザ・フォーク・クルセダーズのメンバーだった北山修氏（現在精神科医および白鷗大学の学長）以来です。山登氏は「新しい言葉が登場するときはそれなりの背景がある」とされています。その背景とは現代社会の捻じれです。「SNSやメッセージアプリなど」で心理的に近くなった反面、「生身のつきあい」は逆に遠くなったのではないかとのこと。そこで、「新しいカタカナ語」によって、若い世代には「その大切さを柔らかいニュアンスでアピール」し、より上の世代には「古い価値観をアップデートする必要」を求めるとのことです。山登氏は書かれていませんが、若い世代は柔軟に受け入れていくことができるが、「年配者」は「眉をひそめて」抵抗を示す、という事でしょうか。私が心配するのは年配者の不適応よりも、カタカナ語の一人歩きや、カタカナゆえの孤立です。まあ、こんな恨み言を連ねても仕方ないので、バウンダリーとは何か、山登氏編の「バウンダリーを語ろう」の中身を読み進めていきたいと思います。文末で山登氏は「君は君、僕は僕なり、だからバウンダリー」という句を読み、さらに、「君は君、僕は僕なり、だからダイバーシティ」とも読んでおられます。違いを認め合い、距離を保つから多様性が成り立つとのこととです。

以下興味深かったテーマを書きだしました。ぜひ本誌をご一読いただければと思います。

「支援？それとも侵害？—教育困難校でバウンダリーを考える」

「バウンダリーの多層性—児童福祉現場から考える」

「職場でのバウンダリー『仕事をする人』としての私、『人間』としての私」

「ソーシャルメディアと境界線—揺らぎと引き直しの絶えざる模索」（葭仲）

「指導と評価」（日本教育評価研究会）

- ・特集1 教科の本質と見方・考え方
- ・特集2 不確実な時代を生きる

「道徳教育」（明治図書）7月号

- ・特集 子ども主体の話し合いができるようにする方法

冒頭の「論説」で「子ども主体の話し合いはどうすれば実現できるのか」という問いに「子どもが問い、対話し、当事者になる教室へ」と題して、立命館大学教職大学院 荒木 寿友（カストモ） 教授が寄稿されています。

◇話し合いの前提として：なぜ意見表明が大切なのか

子どもの権利条約や子ども基本法の4つの原則の中に「子どもの意見の尊重」があるにもかかわらず、日本においてはあまり認識されていないようです。ただ、意見の表明ができにくいのは子どもだけではなく、我われ大人も自分の意見主張することは苦手です。そういう文化がベースにあるようです。AI が台頭して人間の選択に関与しだしている今日、行為主体としての個人を確立していく必要性は増えています。

◇形骸化する道徳の話し合い活動

道徳の授業が形骸化するのとは、「正解はたくさんある」と言いながら、子どもたちは忸度して「望ましい発言」を探し求め、結果として「無難な発言」ばかりになってしまいます。そもそも話し合いのテーマも、子どもが考えたものではないので、話し合いが盛り上がらないのも当然です。

◇なぜ子どもは語らないのか？

＜教師主導型授業＞

教室における会話は教師によって制御され、評価されるという形式をとることが多いようです。特に読み物教材の解釈を中心に設計された道徳の授業であれば、それは「道徳的価値の理解の深まりや新たな価値の創造」ではなく「教師が問うたことへの『正しい応答』」であり、いうなれば『結論の見えた話し合い』になってしまいます。

＜「答える主体」としての子ども＞

子どもが「答える主体」ではなく「問う主体」に変わっていく必要があるようです。「哲

学対話」においては子どもの問いを中心に授業を組み立てているようです。

＜価値葛藤の不在＞

私たちが価値について思考を始めるのは「ゆらぎや対立」が生じたときなので、道徳授業においては「葛藤」を正面から扱わないと、子どもたちは価値について思考を始めることができません。荒木教授は「葛藤なき道徳は、思考を生み出さない」「道徳的思考とは、『正解の確認』ではなく、揺らぎの間を往還する過程の中で生成される」と述べておられます。

◇子ども主体の話し合いが成立する道徳授業の条件

条件①：授業に当事者性があること

子どもが「自分の問いをもって授業に臨むこと」は簡単ではありませんが、荒木教授は実践例を複数示しておられます。子どもたちが「問う主体」となるためには「授業における教師の権力性を相対化すると同時に、子どもに当事者性をもたらすことを意味する」としながら「前提として『問いの質』は教師によって保障しなければならない。すなわち、「よい問いとは何か」について、子どもたちと共通理解を形成すること」が不可欠であると述べられています。

条件②価値の揺らぎや対立の顕在化

自分と他人、今の自分と過去の自分、それぞれの「葛藤」の中で共有可能な『よりよいありかた』を構想するといった価値の創造」が求められるとのこと。

条件③：教室の心理的安全性

「子どもたちが安心して学べるケアに基づく人間関係（自分が自分であって大丈夫という感覚）」が必要で、そのためには「暴力や暴言」によらない「適切な意見表明の方法を育むことが不可欠」とであると述べられています。

条件④：意味のある目的：ウェルビーイングの達成

子どもたちの話し合いが円滑に機能するという事は、子どもたちの生活世界を高めていくことにつながっていきます。

◇結論：子ども話し合いとは何か

「子ども一人ひとりが授業の、当事者として関わり、道徳的価値の間で揺らぎながら、他者との対話を通して意味を生成していく過程である。」と結論づけられています。そして教師の役割は、「問いと葛藤と安全を設計するデザイナー」であり、教師自身も共に「よりよく生きるとは何か」を協働で探究（求）し続ける実践であるとされています。

小学校では2018年から、中学校では2019年から教科化された「特別の教科 道徳」ですが、まだまだ「考え議論する道徳」の実践は不十分なようです。荒木教授のおっしゃる授業は簡単ではないと思います。特に「教室における信頼関係の構築」「問いと葛藤と安全の設計」は話し合いの基本ではありますが、完成形は相当難しいものと思われます。しかし、その方向に向かって進んでいくことも道徳ではないでしょうか。（葭仲）

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育研究連盟編集・東洋館出版社）7月号

- ・特集 LDを見逃さない ～気づきから支援へ～

「初等教育資料」（文部科学省編集・東洋館出版社）7月号

- ・特集 改定に向けた検討事項と、今、大切にしたい取組④
家庭、体育、特別の教科道徳

46 ページ道徳 解説「道徳ワーキンググループの主な審議事項」は文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程第一係が寄稿されています。道徳の「特別の教科」化の成果はデータ（令和3年度に実施された道徳教育実施状況調査）から見る限り、極めて良好とのこと。教科化されたことで「量的確保」がされたことはもちろん、「質的な転換」が図られたとのこと。データによると「児童生徒の学習意欲が高まった（小：84%、中 80%、教委 81%）」「児童生徒同士の話し合いや議論が活発になった（小：88%、中 85%、教委 86%）」

「教師の意識が高まった（小 98%、中 96%、教委 93%）」との結果です。さらに「教科書があることで、教材の選択・作成等に係る負担が減った（小：90%、中：84%、教委 82%）」との成果が示されています。学習指導要領実施状況調査（小：令和 4 年度・中：令和 5 年度実施に）においても 80%～90%の肯定的な結果が得られています。一方 49 ページの「道徳教育の課題」では、61%の教育委員会が「教師の指導力」を課題として挙げているとのこと。その中身は「読み物教材の登場人物の心情理解に偏った授業になりがち」「多面的多角的に考え、自己の生き方についての考え、議論することが十分にできていない」「教科書の発問例に頼った授業など、型にはまった予定調和的な授業になりがちである」などと言われている、「考え議論する道徳」への質的転換は道半ばであると指摘されています。これら成果と課題を総合すると、教科化されたことで量的には確保され、高い成果は得られているものの、授業手法としては「考え議論する道徳」が不十分であるという事でしょうか。教科化された時点では旧来の「特設道徳」で培われた手法が中心で、「内容項目」や「中心発問」だけに焦点が当てられがちでしたが、ここへ来て、道徳教育の本丸である「考え議論する道徳」の方法論が問われるという事でしょうか。そうすると「道徳教育」（明治図書）7月号での荒木教授の記事に繋がっていくのではないのでしょうか。（葭仲）

「中等教育資料」（文部科学省編集・学事出版）7月号

- ・学習指導要領改訂に向けて～各教科等別ワーキンググループにおける審議状況④～

教育科学「国語教育」（明治図書）7月号

- ・特集 国語の自己調整学習 実装ガイド

教育科学「社会科教育」（明治図書）7月号

- ・特集 情報活用能力を高める！質の高い探求的な学びデザイン

内外教育（時事通信社）6月23日 第7336号

冒頭の「ひとこと」でお茶の水女子大学 耳塚 寛明 名誉教授が「メリトクラシー神話からの脱却を」と題して寄稿されています。「メリトクラシー」はイギリスの社会学者マイケル・ヤングの著書（原著：1958 年、訳書：1982 年刊）の題名です。「メリトクラシー」はこの小説に登場する架空の社会学者による造語だそうです。この架空の社会学者はメリトクラシクな社会が完成すれば階級は固定されると考えていましたが、最終的には蜂起した下層階級に殺されてしまうというストーリーです。つまり小説の作者はメリトクラシーの「神話」性を示していると、耳塚教授は述べられます。現代の日本社会はどうかというと、耳塚教授は「メリトクラシーの衣をまとった不平等」社会であると看破されています。よって、入学者選抜・人材選抜等を改革することの必要性を訴えてられます。

私は「メリトクラシー」という言葉についてマイケル・サンデルの「実力も運のうち」という本で知りました。日本語では「能力主義・実績主義」と訳されています。著書の中でマイケル・サンデルは「能力主義が十分に実現さえすれば、つまり仕事や賃金が努力と才能をきちんと反映すれば、正義にかなう社会になる」という考えに疑問を呈しています。また、「能力主義社会が公正であっても、それは善い社会ではないのではないかと懸念しています。こうした社会は勝者のあいだに驕りと不安を、敗者のあいだに屈辱と怒りを生むだろう」とも述べています。

耳塚教授は現代社会が「メリトクラシー（能力主義）の衣」をまとっていると言われます。これをマイケル・サンデルの考えに当てはめると、自分が「実力」だと思っていることは、決して本当の意味での「実力」ではなく、「運」よく能力を活かせる環境に生まれただけということになります。つまり「不平等」な世の中だということです。さらに、マイケル・サンデルはメリトクラシー（能力主義）が実現した世の中であっても、それが幸せをもたらすとは限らないと言っています。その先では、マイケル・ヤングの小説のようなことが起こるかも知れません。（葭仲）